

もくじ

1 目次

2 特集

「～今年もいろいろありました、一年を振り返って～  
加古川商工会議所の平成26年」

7 会議所のうごき

「ぐるり」瀬戸内を巡る旅—会員交流バス旅行を実施—  
他

8 会議所からのお知らせ

年末調整及び法定資料等作成についての相談日 他

9 会員さんNOW

会員さんのうごき

10 誌上セミナー

知っ得！相続税・贈与税

12 団体だより

青年部・異業種交流会・女性会

15 クローズアップ

新保健センター「ウェルネージかこがわ」をよるしく！  
公益財団法人加古川総合保健センター  
専務理事 楞野 博史さん

17 エッセイ

日本の「ものづくり」に思いを馳せて  
（株）二川工業製作所 代表取締役 ふたがわ まさや 二川 昌也

19 インフォメーション

関係機関からのお知らせ

20 会議所カレンダー

ご覧ください加古川商工会議所のホームページ <http://www.kakogawa-cci.or.jp/>



今月の表紙  
「トモエ繊維株式会社」

事業所データ

- ◆代表者 もりもと かつひろ  
代表取締役 森本 勝弘
- ◆所在地  
加古川市志方町永室170番地
- ◆電話 079-452-2035
- ◆ホームページ  
<http://tomoeseni.co.jp/>

◆表紙写真

- ①ファイト！地場産業「靴下」への挑戦が続きます。ここでは家族のようなチームワークが自慢です。（前列向かって右から3番目が森本社長）
- ②編立の作業風景。複雑な指示書に従って熟練した職人さんの指先が手際よく糸をセットします。
- ③商品開発から製造工程表の作成に至るまで、森本社長の肩には熱い期待がかかっています。
- ④すらり、応接室の壁面を埋め尽くす特許・実用新案の数々。開発力の証であり、現在の同社を支えています。
- ⑤履いた瞬間から温かい！「ぼかぼかルームソックス」で今年の冬はもう安心♪

「靴下（ソックス）の挑戦」

昭和41年、先代の森本昭さんにより森本メリヤスが創業されました。現在のトモエ繊維（株）の前身ですが、靴下メーカーとして以後は高度成長の波にも乗り順調に業容を拡大してゆきます。しかし、平成に入ってから安価な輸入製品が国内メーカーを占有するようになると、立ちいかないメーカーや工場が続出、当社もご多分に漏れず受注は激減、そして取引先の倒産等により経営が悪化するに至ります。

「安い海外製品に対抗するためには・・・」この時、社運をかけた決断は、培ってきた技術力を活かした「メイドインジャパン」ブランドへのこだわりでした。そして先代のアイデアで、現社長が具体的に改良に改良を重ね、「のびのび靴下」「ピタソックス」が誕生するに至ります。この靴下は、実際に履く個人の足の形に合せてフィットするように原料から編立に至るまで工夫を凝らした全力投球の逸品で、その後、消費者の皆さんのご支持をいただき、発売以来の累計販売数が1,000万足を超える大ヒット商品となりました。

研究熱心な森本社長は、その後も新しい素材を求めて全国各地の展示会に足を運んだり、兵庫県立工業技術センターなどの産官学連携事業に積極的に参画するなど、新商品の開発に余念がありません。

今一番注力している商品をお尋ねすると「ぼかぼかルームソックス」、摩擦によって発熱する素材を用いて履いた瞬間から温かく感じる優れものの靴下で、「地域らしさ」と「創意工夫」とを兼ね備えた逸品として兵庫県より「五つ星ひょうご」にも認定されています。ただ、こうしたこだわりの商品は原価も高く、従来の流通形式ではお客様の手に届くときには結構高価なものとなってしまったため、身近に安価に提供させていただこうと昨年、ネットショップ「naes hop」を立ち上げました。

「那衣とは、仏典にも登場いたしますが、着る人を何事からも守り抜く衣」のことであり、履く人を寒さから守ると同時に、履いて喜ばれる靴下をとの一念からさらに精進を重ね、靴下づくりに挑戦し続けていきますよ。」地場産業の衰退が声高に叫ばれていますが、何のその！森本社長に熱い期待が寄せられています。

## 日本の「ものづくり」に思いを馳せて

(株)二川工業製作所 代表取締役 ふたがわ まさや 二川 昌也



住所: 加古川市平岡町二俣249-1  
TEL: 079-437-8110  
営業内容: 金属部品製造業

日本には「ものづくり」という言葉があります。この言葉に「物造り」や「物作り」というような漢字が使われていないのは、「ものづくり」という言葉が大和言葉であるからだと伺ったことがあります。中国から伝わった漢字や、欧米からの外来語を訳してきた言葉ではなく、日本が独自に作り出したこの「ものづくり」は、家電製品や自動車、電子機器など、世界に誇れる産業が数多くある日本を象徴する言葉だと思います。

今では多種多様な場面で見られる「ものづくり」ですが、実際に巷で使われ始めたのはここ20年程のことではないでしょうか。60年代、高度経済成長期に生活水準が著しく向上した日本では、製造業は技術者や職人へのイメージが「きつい、汚い、危険」、いわゆる「3K」などとも呼ばれ、敬遠されるような職業でした。

しかしやがて「ものづくり」産業が再び脚光を浴びるようになってきましたが、それは何より日本人独自の「ものづくり」に対する精神文化に影響を受けているように思います。もともと日本人には職人気質というものがあ、技術力の高さに対して尊敬する精神が大事にされてきました。今なお200年以上続く老舗企業が数多く残る日本ならではの伝統文化と言えます。戦後日本が世界に類を見ない経済成長を成し遂げた理由も、この「ものづくり」に対する独特な文化・考え方があったことだと思います。

もちろんこうした「ものづくり」に対する考えは、当社でも変わりません。1943年4月に加古川市平岡町に私の祖父が操業を開始した当初は、機械加工品を製造する小さな町工場でしたが、今では建設機械部品のプレス加工から溶接、機械加工、塗装、組立とすべて一貫して生産ができる企業へと成長しました。これも、ひたすら「ものづくり」に携わってきた職人の方たちの技術力やノウハウの蓄積があったからこそ、私は思っています。

また、「ものづくり」の奥深さを実感するもう一つの言葉である『改善』も、当社で取り組む「ものづくり」を支えるキーワードの一つです。日本人は新しいものに対する警戒心が強く、斬新なアイデアを生み出すより代替え技術を生み出したり、土地・資源の乏しい島国での生活にあわせ、大きくて扱いづらい物を小型化させるなど、使いやすく効率的な形に変化させることに工夫を重ねてまいりました。日本人はこういった『改善』と効率を最も得意としています。そして日本の「ものづくり」は、個性やオリジナリティだけではなく、同じ物であってもより安く高品質な製品を効率よく短期間で作ること、価格・品質・効率化を追求した付加価値を生み出すことで成長を遂げたといえます。

従来より当社の製品は海外で品質・コスト等、好評価を頂いています。最近では、アッセンブリ（集合部品）技術と製造工程の短かさなど、いわゆる日本の特徴が非常に評価されるようになっていきます。そして今後、世界と競うには、こうした日本人でしか出さない技術をさらに身につけ、ものづくりに専念して行かねばならないと痛感する今日この頃です。